

平成30年度第1回埼玉県総合教育会議議事録

1 開会、閉会の年月日及び時刻

平成30年8月23日(木) 午後1時30分開会
午後2時55分閉会

2 会議開催の場所

知事公館 大会議室

3 出席した会議の構成員の氏名

○上田清司知事

○埼玉県教育委員会

小松弥生教育長、門井由之委員、上條正仁委員、後藤素彦委員、伊倉晶子委員、
遠藤克弥委員

4 構成員以外の出席した者の氏名

○知事部局の出席者

北島通次総合調整幹、星野雄一秘書課主幹

○教育局の出席者

小島康雄副教育長、小澤健史教育総務部長、渡邊亮県立学校部長、
松本浩市町村支援部長、古垣玲教育総務部副部長、羽田邦弘県立学校部副部長、
芋川修県立学校部副部長、佐藤裕之市町村支援部副部長、岡部年男総務課長、
八田聡史教育政策課長、小谷野幸也生徒指導課長、
石井宏明市町村支援部参事兼義務教育指導課長、金子隆生涯学習推進課長、
中沢政人総務課報道幹、飯田徹教育政策課副課長、平野雄三教育政策課副課長、
中村洋子総務課主幹、古澤健一教育政策課主幹、廣川佳之教育政策課主幹、
田中雅人教育政策課主幹、秋山佳子高校教育指導課主幹兼主任指導主事

5 会議に付議した事項

第3期埼玉県教育振興基本計画(案)について

6 発言の趣旨及び発言者の氏名

開 会

○小松教育長 ただいまから平成30年度第1回埼玉県総合教育会議を開催いたします。
それでは、議事の進行につきまして、上田知事をお願いいたします。

議 事

第3期埼玉県教育振興基本計画（案）について

○上田知事 はい。議事に入る前に、日頃は、小松教育長は当然のことではありますが、各教育委員の皆様には、本県の教育の在り方全般にわたりまして様々な知見を提供いただき、かつ、いろいろな角度から論点などについても御指摘をいただいていることに心からまず感謝を申し上げたいと思います。

教育は、誰でも教育を受けたことがあり、なおかつ、こと家庭教育に関しては、自らも教育を子供にすることがあった、もしくはそういう機会があったということで、ある意味では、それぞれ個人が一つの教育観を持っております。したがって、多種多様な意見を集約しながら、臨むべき教育の在り方、あるいはまた教育制度の中身について、まとめていくのは非常に困難でありますけれども、不易流行という言葉がありまして、本質そのものは変わらない、しかし、やっぱり時代、時代に合わせて、その本質を極めるために周辺を変えていくという大事な作業があると思っておりますので、その困難な作業を、常に時機に合っているかどうか常に頭を柔らかくしながら、私たちも知事部局という立場の中で応援をしていかなければならないと、また、連携していかなければならないと思っておりますことを申し上げまして、議事進行に入ります。

まずは、本日の会議ですが、第3期埼玉県教育振興基本計画（案）について、これをテーマにして意見交換をさせていただきたいと思っておりますので、教育長から御説明をお願いします。

○小松教育長 はい。では、資料を使いながら説明させていただきます。

第2期の埼玉県教育振興基本計画は平成26年度から平成30年度までの5年間の計画期

間としておりまして、今年度をもって終期を迎えます。このため、江利川毅氏を座長とする第3期埼玉県教育振興基本計画策定有識者会議を本年2月に立ち上げまして、御意見を頂戴してまいりました。第1回の会議には知事にも御出席をいただいたところです。その後、有識者の皆様から御意見をいただいて、この案の検討を進めてまいったところです。

本日は、その計画（案）につきまして御協議をいただきたいと考えております。

では、資料の1ページを御覧ください。

これが第3期の基本計画（案）の概要でございます。

まず、資料左上にありますとおり、次期計画の検討に当たり、現行計画の成果と課題を整理いたしました。第2期の期間においては、それぞれ矢印の左側にあるとおり、「確かな学力の育成」、「心と体の育成」、「学校教育環境の充実」などに取り組みました。

今後の課題といたしましては、矢印の右側にありますとおり、「埼玉県学力・学習状況調査を活用した指導改善の一層の推進」、「児童生徒の自己肯定感・自己有用感の向上、運動習慣の確立」、「教員の授業力向上」などが挙げられます。

また、資料右上にありますとおり、本県教育を取り巻く環境も大きく変化をしております。人口構造の変化、急速な技術革新、グローバル化の進展などの変化が見込まれており、こうした中で、今後の社会を正確に予測することは難しくなっております。

以上のように第2期計画の成果と課題、教育を取り巻く社会の動向などを踏まえ、今後、埼玉県として取り組むべき課題を5点に整理いたしました。第1に「社会の激しい変化に対応するための知・徳・体の育成と環境整備」、第2に「職場や地域社会で多様な人々と連携・協働する力の育成」、第3に「多様なニーズに対応した教育機会の提供」、第4に「家庭教育の支援、学校・家庭・地域の連携・協働」、第5に「人生100年時代を見据えた生涯学習・文化・スポーツの推進」です。

そして、これらの課題に対応して、今後の埼玉教育を進めていく上での基本的理念を、その下にございますように、「豊かな学びで未来を拓く埼玉教育」といたしました。

その心は、誰もが参画し得る生涯を通じた多様な学びを実現し、自身の人生や社会の未来を切り拓く力を育成するということを目指すというものです。このために、夢や志、豊かな心を持ちつつ、社会の激しい変化に対応して主体的に社会に関わり、未来に向けて新たな価値を創造できる力の育成に取り組むこととしております。また、埼玉教育の強みを生かすということについて、有識者の中から非常に強い御意見がございまして、この強みをさらに発展させていくため、埼玉県学力・学習状況調査や協調学習、学校応援団など、

本県独自の先進的な取組の更なる発展や充実に取り組むこととしております。

そして、この基本理念の実現に向けて、計画全体を通して留意すべき視点として、「未来を生きる力を育む」、「多様な人々と絆を深める」、「生涯の学びと活躍を支える」という3つを挙げております。

この基本理念を踏まえた上で、教育をめぐる様々な課題に応じて10の目標と30の施策を示しております。主に児童生徒に対する施策といたしまして、「目標Ⅰ 確かな学力の育成」から「目標Ⅴ 多様なニーズに対応した教育の推進」までを、次に、主に子供を取り巻く環境に関する施策といたしまして、「目標Ⅵ 質の高い学校教育のための環境の充実」、そして、「目標Ⅶ 家庭・地域の教育力の向上」を、そして、あらゆる年齢層に対する施策といたしまして、「目標Ⅷ 生涯にわたる学びの推進」から「目標Ⅹ スポーツの推進」までの目標と施策を定めております。

その下に、これらの施策の中で特に埼玉教育が今後5年間で挑戦する取組として3つ挙げてございます。①「埼玉県学力・学習状況調査や協調学習の拡充」、②「学習データを活用した個に応じた学びの研究」、③「地域との連携・協働による社会に開かれた学校づくり」、これらに新たな挑戦として取り組んでまいりたいと考えております。この詳細につきましては、後ほど御説明をさせていただきます。

最下段でございますけれども、計画の推進に際して、県教育委員会、県ということだけでなく、市町村、学校、家庭、地域、大学・企業等など、様々な関係者の御協力も必要ですので、社会全体で教育に取り組むこととしております。また、客観的な根拠を重視した行政運営、最近、EBPMと言っておりますけれども、そういったことに留意しつつ、PDCAサイクルにより計画を着実に実現していくことを記載しております。

次に、資料の2ページを御覧いただきたいと思っております。

先ほど申し上げました今後5年間で挑戦する取組について、少し詳しく説明をさせていただきます。

資料の左側がこれまでの本県独自の取組となります。具体的には、「埼玉県学力・学習状況調査」の実施・活用、「協調学習」の実施、「学校応援団」の活動支援に取り組んできたところです。

埼玉県学力・学習状況調査は、子供たち一人一人の学力の伸びや非認知能力等を継続して把握できる本県独自の調査です。この調査結果を基に、毎年約30万人分のビッグデータの分析・研究を行うほか、調査の共同実施や調査結果の共有、活用に向けて官民の多様な

主体で構成するコンソーシアムの開催、そして、調査結果を踏まえた市町村・学校への重点的な支援などに取り組んでまいりました。

今後の方向性として、調査結果から効果的な指導を実施する学級を見出し、指導の工夫・改善に活用することで、各学校における指導改善サイクルを確立していくことや、埼玉の優れた取組を全国にアピールしていくことを考えております。

次に、協調学習についてです。

本県では、平成 22 年度から東京大学 C o R E F と連携して、主体的・対話的で深い学びを引き起こす知識構成型ジグソー法の手法を用いた協調学習の授業づくりを研究してまいりました。協調学習の対外発信に向けて、未来を拓く「学び」プロジェクトシンポジウムを開催し、平成 29 年度には、21 都道府県から 700 人超の参加をいただきました。また、研修や公開研究授業を実施し、教員の資質能力の向上を図ってまいりました。「主体的な学び」に関する研修を受講し実践した教員数は、平成 24 年度には 748 人でしたが、平成 29 年度には、およそ 10 倍の 7,057 名まで増加をしております。

今後の方向性として、I C T 等を活用し、一人一人に適した教育の研究に取り組むことを考えております。

次に、学校応援団についてです。

これまで本県では、学校応援団を県内全ての小・中学校に組織しまして、その活動回数は年間平均 223 回に上り、子供の学習活動支援や安心・安全確保に向けた取組を実施しております。他方、現状の関係は、学校が地域から支援してもらうのみの一方向の関係が多く、地域と学校をつなぐコーディネーター数も減少傾向にあります。今後の方向性として、地域の側にもメリットがある持続可能な関係の新たな創出が求められます。

以上がこれまでの取組でございます。

資料の右側では、これらを踏まえて、今後 5 年間で挑戦する取組として、「埼玉県学力・学習状況調査や協調学習の拡充」、「学習データを活用した個に応じた学びの研究」、「地域との連携・協働による社会に開かれた学校づくり」の 3 つを挙げております。

まず、「①埼玉県学力・学習状況調査と協調学習の拡充」でございます。

埼玉県学力・学習状況調査の拡充といたしまして、児童生徒の学力を伸ばした教員の授業動画を活用した研修を実施するなど、調査結果から見えてきた教員の効果的指導方法を全県へ普及するほか、本県の取組を他の自治体にも拡大させ、調査データや効果的な取組を共有してまいります。

また、協調学習の充実としては、協調学習の質の向上に向けた取組を推進していきたいと考えております。具体的には、協調学習マイスターによる研修の実施や、ICTを活用した協調学習の推進などがございます。さらに、学校間を超えた授業づくりのネットワークの拡充といたしまして、小・中学校、高等学校の教員を対象とした協調学習に関する合同研究会の開催にも取り組んでまいります。

次に、「②学習データを活用した個に応じた学びの研究」でございます。

資料の図にありますとおり、学力テスト等のデータの分析を基に、「個に応じた学び」の実現に向けた研究に取り組んでまいります。また、県学調のデータ活用の一環として、アスポート事業、ジュニア・アスポート事業などを行っております福祉部とも連携した取組を実施してまいります。

次に、「③地域との連携・協働による社会に開かれた学校づくり」です。

ここでは、学校応援団の取組を一層充実させ、学校と地域の連携・協働という双方向の関係を創出すること、そうした取組を通じて、地域全体で子供たちを心豊かにたくましい人材として育むことを通じ、学校も地域も豊かにしてまいりたいと考えております。

具体的には、地域全体で地域学というものを構築することや、発達段階に応じてこの地域学を学ぶことを通じて、実社会を教材として生きる力を育むとともに、地域社会の活力につなげていきたいと考えております。

以上が今後5年間に挑戦する取組でございます。

以上、概要について御説明をいたしました。

資料3 ページ以降は、参考データといたしまして、第2期計画の指標の進捗状況のグラフとなっております。平成29年度末時点では、全33指標のうち25指標が計画策定時よりも上昇し、そのうち9指標が目標値を達成しております。

本日はこの第3期計画案につきまして御協議をいただきたいと考えております。本日の御意見を踏まえて、今後、詳細を詰めた後、県民コメントを実施して計画案をまとめてまいります。

よろしく願いいたします。

○上田知事 はい、御苦労さまでした。

では、協議を行いますが、ただいまの説明に対して皆さんの意見というか考え方などを開陳していただきたいと思っておりますし、場合によっては、中身について御説明を更にしていただくとか等々をお願いしたいと思います。

○門井委員 この計画を作るに当たりまして、有識者会議等の議論を踏まえてという教育長のお話もありましたが、私も参加させてもらっていろいろお話を伺って、非常に多方面からいろんな御意見を承って、それをまとめたものということで、非常に中身の濃いものに仕上がっているなという感じはしております。

ただそれだけに、非常に多方面にわたって中身が濃い部分が、逆に県民の方々にとっては焦点が絞りづらいというか、なかなか掴みにくいものになっている感じがします。やはり県民の人にこういう基本計画を基に埼玉教育をやるというのをお示しして御理解をいただくというのが非常に大事だなと思っております。そういった意味で、今、教育長が説明されたこの概要版ですね。これを上手に活用して、県民の方に分かっていただくというか、そういう形をとるのがよろしいのかなと思っております。

ただ、この概要版は非常に盛りだくさんで、いろんな方面に行っています。これも、じっくり本当に教育を考える方にとっては物足りないぐらいなのでしょうけれど、県民にとってはなかなか分かりづらい部分もあるので、この部分をもう少し分かりやすく、県民の方にとって掴みやすいものにする 것도大事かなというふうに思います。

この中で、具体的にちょっと申し上げますと、今後5年間で挑戦する取組ということで3つ挙げてあります。例えば、埼玉県学調の拡充等々が書いてありますが、では、埼玉県学調って何なのみたいな話になります。例えばもう少し具体的に分かりやすい、指標をこれからいろいろ御検討されて、それぞれの施策の指標を考えていくのだと思いますので、その指標のうち最も県民にお知らせしたい、この5年間でこういうことを埼玉の教育は目指すというような指標を少しこの部分で、挑戦ということですので、取組をお示しをするような、非常に難しいのしょうけれど、そういうことも検討されたほうがいいのかなどは個人的には思っております。

○上田知事 ありがとうございます。関連する議論があれば、もうお一方。

○伊倉委員 私も門井委員と同じく、やはりこちらの概要は恐らく全てを網羅していて、目次としてはもう完璧なんじゃないかなと思います。けれども、優先順位がやはり非常に分かりにくい。それから、優先順位を付けないと、限られた財源の中で、恐らく全てがやっただけで終わるんじゃないかというふうに現場の人間としては思っております。

先程、知事が実態に合わないものはやはり合わせていく必要があるというふうにおっしゃいましたけれども、実際に現場でやっている人間としましては、この中で大事なことは何だろうというふうに考えますと、このセンターの基本理念と、それからこの理念の実現

に向けた3つの視点を大きくクローズアップをして、その中に具体的にこういうことがあるんですよということをやっていく方が分かりやすいなというふうには感じております。例えば基本理念も、これは誰のためにということが、主語がないので、例えば県民一人一人が豊かな学びで未来を拓くための埼玉教育ですというふうにし少し柔らかくしつつ、未来を生きる力を育む、多様な人々と絆を深める、生涯の学びと活躍を支えるというこの3点に絞り込んで、まず、この目次となる概要の前に、埼玉はこういう教育を目指しますというのをきちっと分かりやすく打ち出した上で、この目次が来るといいのかなと思いました。

どうしても、これを県が作ると、その後、市町村の方に流れていって、市町村はこちらを基に現場の具体的な事業を展開するかと思いますが、私は志木市で地域活動をしていますと、むしろ逆行しているんじゃないかということがやはりあります。

例えば、この「多様な人々と絆を深める」と「生涯の学びと活躍を支える」と、子供の教育というのは全てリンクをしていることで、決してこのようにきれいには分かれませんが、事業ごとに予算が組み込まれていて、なかなかそこがリンクできないなんていうことが非常に多くあります。そういう意味では、できれば県の方で作るものは、余りカチカチとせず大きく緩やかに作っていただいた方が、現場がそれを流用しやすいとか実態に合わせてやりやすいのかなという気もいたしました。

ただ、目次としては全部を網羅していてとても良いのですが、では、現場でこれを活用できるかという、むしろやりにくいかもというのが正直な気持ちです。

○上田知事 ありがとうございます。

関連で、遠藤委員、お願いします。

○遠藤委員 お二人の意見と関連してですが、正に今、伊倉委員がおっしゃったような、例えば一番上に第2期計画の成果と課題があって、右側に教育を取り巻く社会の動向等、これから本当にやらなければいけない、こういう変化があるから対応しなければいけないという社会の動きがあって、その下に、今後取り組むべき課題が①から⑤まであります。ここを読んで、すぐ下に施策が30ずらっと並んで、非常に総花的に素晴らしい。

では、具体的に何をやるのかということになると、2ページに、今後5年間で挑戦する取組というのが1、2、3とあるだけ。これだと、これをやれば今後5年間はいいというふうに勘違いしないでもない。

ところが、また元に戻って、10の目標と30の施策、これをどうやってどのような順序で私たちは学校教育の現場で取り組んでいくのか、これはちょっと説明をつけないとこれ

では分かりません。確かに、重要なことは重要です。社会の変化、例えばグローバルの進展なんていうことを一つ取り上げても、目標 I の施策 3 の「伝統と文化を尊重しグローバル化に対応する教育の推進」、これは何なんだと。伝統文化を大事にすることはそうだけれど、多分我々にとって最も大切なのは、今、労働力がどんどん減少していますから、外国人労働者がどんどん入って来ざる得ない状況にあって、そういうときに子供たちは、いわゆる多文化教育、お互い理解するような、いわゆるマルチカルチュラルエデュケーション、そういったものを主軸にしたグローバル教育をやっていかなければいけない。そういったことをどこへ考えてそのことができるのかということまで、先まで考えているのかなというのがちょっと 1 つ疑問であって、今お二人の意見と併せて、全体を見た感じです。

○上田知事 教育長、今の意見に対して何かありますか。

○小松教育長 まず、この見せ方という問題があるのかなと思いますが、それについては、有識者会議でも非常に言われていまして、県民一人一人が何をやればいいのかとか、それから、学校の教員がこれを示されて、教員として何をやればいいのかというのとはもっと分かるようにしてほしいという御意見がありましたので、そういった資料を作る必要はあると思っております。

これは本日の資料であり、そういう県民にお見せするときに、多分一番上の方は要らないし、もうちょっと分かりやすくするとか、事例を入れるとか、県学調とはどんなものかのような、そういったことも必要だと思っています。特に、県学調もそうですし、あらゆる年齢層に関する施策などは、それこそ県民一人一人にいろいろ活躍、活動をしていただく部分ですので、そういった見せ方をしないといけないというふうに思っています。

内容的には、教育振興基本計画ですので、全体を網羅する必要がある、このような形になっていますが、遠藤委員がおっしゃったような部分が若干弱いのかなというふうにも思っています。これまでやってきたことが弱いというのものもあるのかもしれませんが、そういったことは強化をしていきたいというふうに考えています。

○上田知事 どうぞ、上條委員。

○上條委員 これは 5 年間の基本計画ということなので、とても幅が広くて、やるべきことも山のようにあって、それをどうやって整理してみるかなというのと、こういうふうにならざるを得ないという面も、これはもう、しょうがないという気がします。

1 ページ目で重要なところはどこかと考えてみると、私の意見ですけれども、今後取り組むべき課題というところから、10 の目標と 30 の施策の上のところ、基本的な理念と視

点というところですね。これについては、やっぱり埼玉県民の親御さんも子供たちも理解してほしい一番の肝のところなのかなという気がします。これは教育長おっしゃるとおり、見せ方の問題になるのですが、その下の10の目標と30の施策というのが、上で言っていたことが1、2、3の視点のところでも1回リセットされてしまって、今度は「主に児童・生徒に対する施策」とか目標とかというふうに、切り離されてしまうんですね。したがって、理念と視点というのと施策が直接的には結びつかないようなイメージを持ってしまうという嫌いがあるのかなというふうに感じます。

したがって、見せ方としては、この理念とか視点というところをもうちょっとはっきりさせて、目標とか施策については、その中からポイントを絞って、視点との間の紐付けをきちっとしてあげるということが重要なのではないかなというふうに感じます。この1ページ目をどう見せるかという意味ではですね。そうすると、子供たちも親御さんもどういう基本的な理念があって、そこから派生する視点というのはどういう視点があって、それを実現していくための目標や施策というのがどこにつながっているのかというのが見えてくるのかなという気もいたします。1ページ目のところはそんな感じを持ちました。

○遠藤委員 1ページのこの裏面は、やっぱり年で、これは1年、2年というのは動かないあるべき不易流行、不易な部分ですね。私は、先々週、大学で教員免許更新講習をやりました。10年ごとに受けなければいけない、その講習の講師をやったんですが、私の担当が我が国の教育施策の問題で、ちょうど、この基になった文部科学省のものをパワーポイントで出して、私なりに全部施策を説明しました。その感想が、こんなに1年でどうやってやるんですかという質問でした。

ですから、これを掲げるのは素晴らしい、私たちも教員も正にこのとおりに思っているんだけれども、では、どれを最重点項目として各目標で始めていけばいいのか、どれから手を付けるかという最重点項目があって、2番目に重点項目があって、この辺までいけばという目算が立てられるような、そういう説明がこの後欲しいですねということがありました。

○後藤委員 埼玉教育という一括りにして、1枚にまとめるということは相当難しい、甚だ無理なことなんだなというのを、有識者会議等も見つめてきて感じる中で、この立て付けを変えながら、いかに分かりやすくまとめるかという努力も私も見てきていますし、今現状の中では、すごくよくまとまっているんじゃないかなというふうに思っています。

計画を作るのに一番大事になるのは、今までの第2期の計画の成果と課題をいかに見る

かということ、問題意識をいかに持つかということ、現状をどう見るかということ、いかに具体的により多くの人々が共有できるかということが最も大事なことであり、と思っています。そういう意味では、この成果と課題というところも初めの資料ではもっと多かったわけですが、これだけ絞り上げてきて、この行間にたくさんのことがあるというのは私なりには理解はしているつもりです。

そういった中で、私も1年間、様々な角度から、時には家業をほったらかしながら教育委員として見させていただき、本当に正に埼玉教育をいろんな角度からやられているということを教育委員になって初めて見させていただきました。色んな取組をされている中で、成果も少しずつ出来てきているというふうに思います。

ですから、今まで5年間やってきた第2期計画のものをより多くの形に広めることが第3期の大きな課題だと思っていますし、決して今までやってきたことは間違いではないと思っています。関東の中でも、いろんな教育委員の方とも話をしますけれど、正に埼玉教育というのは、私は誇れるものだというふうに思っています。それを今から5年間でモデルを作るという時代ではなくて、今までもうモデルはたくさん出来ているんだと思います。それを全県それぞれの形に合ったものとして力強く推進していくのがこの5年間の役割だと思っていますし、そういう意味では、この10の目標と30の施策の中における、例えば19番の「魅力ある県立高校づくりの推進」のように推進とか活用とか、そういった弱い表記では、私は良くないのではないかと思います。むしろ全てに関して、過去第2期で取り組んできたモデルや事例を全県全てに合った形で実践をしていくという強い思いというか決意を、この中にももっと書く必要があるのではないかなと思っています。

本当に素晴らしい取組が、この2枚目がありますけれども、多角的に何かをこれだけを順番をつけてやっていくというのではなくて、やっぱり教育局の組織力を持っていろんな角度から優先順位をそれぞれに持ちながらやっていくことが必要なことだと思っていますし、もっと力強い基本計画が必要なんじゃないかなと思っています。

○上田知事 それぞれ見る角度で違って来るんですね。現場に立つ教師の立場で書いてあるようなところもあれば、そういう現場に立つ教師たちの環境を整備しなければならない教育委員会の事務方の立場であったり、あるいはまた、全体の指針を決めるこの教育委員の皆さんたちの総合的なそれぞれの考え方をとりまとめた形での最高方針の考え方、それから当然、文科省あるいは国の考え方との関連も含めて、埼玉の独自性も出していかなくてはならないと。受け止め方は、それと同時に親の立場から見たときにはどうなのかと

か、それから、応援していただいている関係の、学校応援団も含めて他の部分の人たちから見たときの立場はどうなのかということで、どうかするとごちゃまぜになっているんですね。また同時に、ごちゃまぜになるんですね。それを教師バージョン、あるいは教育委員会事務方バージョン、あるいはまた、親や保護者バージョンみたいな形で見ていくと、この考え方、その組み方によって全然また違ってきて。これ、一つ一つ見ていくと、結構ごちゃまぜに入っているんですね。

例えば、「確かな学力の育成」、これは子供たちにこうあってほしいという、心と体の育成についても児童生徒の在り方についての考え方、あるいは学校教育環境の充実では、教員の授業力の向上、これは教員としてこうあってほしい、そのためには教育環境というものを充実させなくてはいけない。これは、例えば様々なプログラムもそうですが、環境整備も必要かもしれません。そういったものは誰がやるのかという話になってくると思いますが。家庭・地域の教育力の向上、親の学習の推進とか学校応援団、これは頼むわけであって、我々ができる話ではありません。ぜひお願いします、と頼まなくちゃいけない、こういう話だと思っています。どんな頼み方をしなくてはいけないのかという課題も出てくると思います。生涯学習活動の支援とスポーツの推進、これもまた正しく地域の課題でありますので、地域のリーダーにお願いをしなくてはいけないし、また、ただお願いをするだけではだめなので、そういう枠組みだとか環境もつくっていかなくてはいけない。あるいはそれを支援しなくてはいけない。

それぞれ計画の成果と課題についても対象が異なっていて、対象が異なる部分も含めて、環境がまたそれぞれどんどん変化していますね、こうした環境を踏まえてやっていきましょうということ。これも全部に通用する「豊かな学びで未来を拓く埼玉教育」と、これは今申し上げたように、学校の部分、生徒の部分、教師の部分、地域の部分、関係団体の部分にも全部つながる話にはなっている。

理念の実現に向けた3つの視点、これを少し細かく見ていくと、ややこっこのほうに力点があるなど、この分野のほうに力点があるな、対象はこっこのほうだねとか、少し分かれています。主演が子供たちとすれば、この周辺のわき役が我々になってくるわけです。主演男優とか女優もいるんですけれども、主演者が、ちょっと違ってきて、この10の目標と30の施策についてもダブルブッキングするところもあれば、それぞれの部分もあるという形なので、こういう配列にならざるを得ないのかもしれませんが。本当に先程もちょうと、それぞれ、いろんな意見をいただきました。その枠組みの中で、私たちはどうかすると、

誰の立場でこれを作っているのかということについて忘れがちで、それぞれ注文があるので、みんなの立場を全部盛り込んで入れているので、盛り込んでもいいのですが、それを今度は実施する工程の中では、少し分けなくてはいけないのではないかなと思います。これは生徒向きです、これは教員向けです、これは地域向けですというふうにしないと、守備範囲が広がってしまいます。みんな自分たちの守備範囲があるわけです。地域の守備範囲は地域の守備範囲、教員の守備範囲は教員の守備範囲、保護者の守備範囲は保護者の守備範囲、本当はあってないようなものかもしれませんが、主たる守備範囲です。ここだけはやっぱり責任持とうというようなのが出てこない、実行しづらいのではないかなというふうな感じを持ちました。

それぞれが実行しているので、結果的には有機的につながっているんだという考えもあるかもしれませんが、ちょっとそんな感じを持ちましたので、参考意見として申し上げました。

○遠藤委員 おっしゃるとおりで、様々な見方がございます。これを見ていますと、これは文部科学省が作ったものを基にこれを作っているわけですから、それとそんなに変わっていないんですね。それを基にこれを作っているわけですから、これがどうなるかという、これが市町村においていくわけです。市町村も同じようなものを手にとって、さあ、これをどうしようということになるわけです。では、埼玉の今後5年間の特色ある教育というのはどれなのか。どこをどうするのが埼玉の問題、課題に応えることなのかということが私は一番大きな問題のような気がしています。

だから、いろいろな方法が見えて、正に全てこなせればそれはそれに越したことはないのですが、ちゃんと5年間を先に見たときには、全てを見るわけにはいきません。でもこの中で、やっぱり私たちがこれは埼玉らしい、埼玉で今問題になっていることが見えてくる、その議論をしなくてはいけないんですね。それぞれに見えているものが違いますから、それぞれの人たちが出したものを、じゃ、今後5年間はこれをこの1枚目の中で強調点にしよう、そういったものを出して、市町村に示していく。そうすれば埼玉全体が同じ方向を向いて、同じ教育ができるんじゃないかなと思うんです。

その1つに、2枚目の5年間というのがあるのだと思いますが、これと1枚目を比べると、余りにも数が違いますので、この辺もどうしようか、ちょっと議論の必要があるかなと感じました。

それにプラス、知事のおっしゃった、そのときにどこから見ているのか、自分たちが、

これは今後5年間の埼玉教育で一番大切であると言うときに、誰の立場でそれを言うのか、それはおっしゃるとおり、大切だと思いました。

○伊倉委員 私も知事がおっしゃった対象者ごとのバージョンを考えていくというのはすごく分かりやすいなというふうに思っています。そのためにも基本理念の県民一人一人が「豊かな学びで未来を拓く埼玉教育」というのは、誰もが参加し得る生涯を通じた多様な夢を実現し、自身の人生や社会の未来を切り開く力を育成するためにやる教育ですというのがすごくはっきりと出していないと、やはりずれてきてしまうのではないかなというのが再度思ったことです。その基本理念を学校、家庭、学校、地域といった対象者ごとによほど大きく打ち出しつつ、それをこれまでと違い、リンクさせていくということが今とても大事ななというふうにはお話を聞いていて思いました。

これまでは施策ごとに、本当に予算も人手も守備範囲も全てが細切れだったけれども、もう今の時代、そんなことではやはり地域はやっていけないですね。教育って学校だけで考えるものではないというのは正直当たり前なんですが、まだ学校の中では、そういった体制というか風潮があると思います。

先日、山形の知り合いが最上川の氾濫で大きな被害を受けまして、彼女がやはり地域活動をやっている仲間なのですが、「足腰弱いと命取り」と言っていたんですね。年寄りだけではなくて、子供たちも自ら逃げられなかったと。そんなことを考えると、地域を守っていくということはこの教育にもつながっていて、全部をトータルに考えていった中で、じゃ、1年度目はこれだ、2年度目はこれだというふうな、一人一人の人生みたいなものを相当きちっと考えて、やはり遠藤委員おっしゃっていたように、議論するというのがもうちょっと足りないのではないかなというのは思っています。

先程も申し上げたんですけれども、県が全て決めてしまっているわけではないんですが、やはり市町村は、これを見ると、右に倣えになり兼ねませんので、県が出す分はもう少し緩やかにしていただいて、市町村にきちっとそのあたりの理念をまず説明をしていただき、かつ現場の市町村であったり地域の住民に考えさせるような取組を県はしていかないといけないのではないかなと思います。この半年、教育委員としていろいろ回らせていただいていると、県がこんなにやっているけれども、決して現場にはそれは伝わっていないということを感じてきたので、これをもっともっと地域が考えるというきっかけにしていったらどうかと思いました。

○後藤委員 私は、この5年間を振り返った中で、文科省が出すものと埼玉県が出すもの

って、さほど相違はないんじゃないかと思います。というのは、埼玉県は山村部もあれば都市部もありますし、農村部もありますし、やっぱりいわゆる日本全体の縮図といっても過言ではないという気がします。そういった中では、文科省が捉えるべき日本人としての教育の在り方と埼玉県に生まれ育っていく人たちをどう育てていくのか、また生涯どうやって過ごしていくのかということを見たときには、埼玉というのは全国的なもののシンボルであるべきだなと思っています。逆に言えば、市町村単位ではより細かな目標なり理念というのは持つべきだと思います。

何が一番必要になってくるのかということ、やっぱり埼玉県として何をなすべきなのかということであり、また、埼玉県というスケールメリットを生かす中で、どういった県としての役割、職務分掌を果たすことができるのかということ、を落としどころとして落とす中で、理念であったり目標であったりということ、をどう立てるか、5か年の計画をどう立てるかということが最も重要になってくるんじゃないかなというのを私はすごく思います。

○上田知事 ありがとうございます。

○上條委員 今までの委員のお話のとおりなんだろうなと思っています。特に、こういった基本計画ですので、網羅的にならざるを得ないというのはもちろん、またそういうものも必要なんだろうというふうに思っています。その中で、いかに埼玉教育の特色を出すかということで、今後5年間で挑戦する取組ということでこの3つを出していると思います。

また、1期、2期を通じて、特に県学調、あと協調学習等々は本当に埼玉が先進的に取り組んできたことですので、やはりこういったものを前面に打ち出して、こういったものをもっとしっかりと伸ばしていくんだ、取り組むんだというのを出す意味で、私は他の委員さんと若干違うかもしれませんが、この挑戦する取組というのは、これはこれで非常にいいのかなと思っています。

ただ、ちょっと抽象的なので、冒頭申し上げましたように、これらを踏まえたもっと分かりやすい指標というか目標を打ち出して、県民にこの5年間でこういったことをやりますというのを打ち出せるようなものができれば、より分かりやすいのかなというふうに思っております。

○上田知事 また申し訳ありません。私もちょっと意見を言わせていただきます。

後ろのほうにデータで、2期の教育振興基本計画の進捗状況の中で、それぞれ成果を非常に得ているところと、まだまだそうでないところ、あるいはやや停滞気味というのとあるわけです。それを踏まえての成果と課題という形になっているのですが、一番の基本と

というのは、私はやっぱり学校教育だと思っております。子供たちが正に豊かな学びで未来が拓けるような、自己肯定的な人生観を得るような、学力は弱いけれども運動は抜群だとか、物覚えは悪いけれども数式を解く能力というのは抜群だとか、いろんな能力を自己肯定的に見る力、そういうものを引っ張っていく教師の技量が求められます。

ただし困難地域がたくさんあるんですね。東秩父村だったら学校応援団なんか何も要りません。もう自然体で村全体が学校応援村になっている。だから、不登校なんかゼロです。その辺でぐずぐずしているやつがいたら、蹴っ飛ばされてしまいます。お前何やってるんだと、早く学校行けと、これで終わりです。

そういうところもあれば、やっぱり良いも悪いも集合住宅の中で、そんなに構うことができない立場の中で、学校に行っているものだと思ったら学校に行っていなかったとか、お母さんが先に出かけちゃったとか、シングルマザーの家庭環境にあるとか、あるいはお父さん一人の家庭で、ちゃんと朝飯食ったら行ってねと言って、お父さんは先に出ていったと、ところが学校に行っていなかったとか、そういう困難な、しかし、隣人は全く分からないということがあります。困難なところというのはいろいろあるので、正にそういうものを地域でカバーしていこうという仕組みも入っているわけですが、基本的にはやっぱり、確かな学力の育成、心と体の育成と、その目標もこのとおりであって、とりわけ埼玉県の学力・学習状況調査の活用、協調学習の部分が、これはやっぱり埼玉県の売りなので、これが基本になりながら、では、これをもっと実現するためには教員の授業力の向上、それには様々な環境が必要ですねということになってくるでしょう。ただ、教員だけでも限界がありますねということになるので、学校応援団をはじめ地域の力が必要だし、それからまた、場合によっては親の支援も必要ですけども、親に対する支援も必要なんですね。

そういうものをこの30項目の中にずっと一応は書いてある。ただ、順序がどうなのか、少しストーリー性を出した方がいいのかなという感じはします。1つの平面で重なるしかないので、出しにくいのかもかもしれません。だから、1枚の紙でやればそうかもしれません。が、標題の中でストーリーをもうちょっと入れていくと何が狙いなのかというのが1枚紙で見えるかもしれません。

これを見ていくと、1枚紙の中身がトータル的にはこの概要はこうですということが見えてくる。あと、立場、立場で見えるものが違って、全部皆さんに読んでいただくというのも大変です。この中からピックアップした形の中で、学校応援団にはこういったところを理解していただくとか、親の学習の対策をしていただくとか、そういうバージョン

のものが多分必要になってくるでしょう。どちらにしても、これは我々のために冊子ができるのではなくて、やっぱり正に未来を担う子供たちのためにあるわけですので、この部分を忘れなければ、そこに常に戻るような、原点が忘れられないようにしていけば、一番、元々は何だったっけというところを常に意識しないと、ついつい元々のためにいろいろなことをやっているんだけど、いろいろなことをやっていることがいつの間にか目的になってしまうので、これは注意しておかなくてはいけないなというふうに思います。私は常にそういうことを意識して物の考え方をする癖を付けているところですけども、ぜひ、そういうまとめ方を常に意識していただければと思います。形はいろんな編集の仕方があると思いますので、間違っているところなんか1つもないわけで、結論からいえば、本当の話がよくできていると思います。だけれども、見方によっては、ちょっとずれているのではないとか、ややこしいんじゃないとか、もっと簡素にできないのかとか、それは立場、立場で異なってくると思います。だから、場合によっては、バージョンが必要なのかなというふうに私は思ったりします。

どうぞ、上條委員。

○上條委員 今、知事がおっしゃったことの繰り返しみたいになっちゃうんですけども、先程申し上げたように、基本理念というのをこういうことで設定しましたと、それは取り組むべき課題だとか取り巻く社会の動向だとか、さまざまなことが変化している中で、今の埼玉教育の基本理念というのはいくつに定めましたと、この基本理念を実現していくためには、3つ視点を持ちました。「未来を生きる力を育む」と「多様な人々と絆を深める」、「生涯の学びと活躍を支える」というふうに3つの視点があって、今度は、その下に書いてある10の目標というのをこの3つの視点ごとに分けてみるとどうなるんだろうかというふうに考えると、要するに、本来、理念から視点に落ちて、それが今度施策にブレークダウンされていくというロジックが見えると、誰もが理解しやすいという感じがします。

したがって、今見てみると、目標1、目標2、目標3、目標4というのは明らかに視点1に近いと思います。目標5というのは、視点1と視点2に跨っているのかなと。目標6は、目標1から5までを実現していくための環境整備みたいな部分なので、この裏方にあるので、どちらかという、くっついているのは視点1の背景かなという感じがします。今度、目標7は視点2に近いですね。目標8から10までは、どちらかという視点3につながるのかなという感じがします。

そう考えていくと、ロジックのブレークダウンを整えていった方が何か見る方にとってみると分かりやすいかなと思います。加えて、先ほど知事がおっしゃったように、対象がちょっと違って、その対象をその中でより見やすくすると、理解は非常にしやすくなるというふうに感じます。

それから、挑戦する取組が3つあるんですが、これは何か唐突感があります。施策からこの3つの取組に行くときに、これはどこかにみんな含まれているものなので、ここに3つ出してくるのは、逆に分かりにくくなる。実はこの3つと書いてあるんだけど、2と1はほとんど一緒に、だから挑戦する取組というのは2つなんですよね。とすると、これは目標1から4までを実現するための手段としてこの1、2があり、3というのは視点2と若干の視点3みたいなものを実現するための挑戦というふうに捉えればいいんだろうと思っていますが、そこもロジックが割と飛んでしまうので、分かりにくい部分があるのかなという気がします。

では、中身はどうかというと、今まで皆さんおっしゃったとおりで、中身については非常に網羅的にできていて、これまでの成果と現状の課題をよく踏まえて、一つ一つの施策については十分に議論がされて立てられているというふうに思います。

今度施策を実現するためには、当然のことですけれども、さらに、対象者は誰で、所管すべき人は誰で、本当に動く人は誰で、データやツールはどうあって、アクションプランができてくるということは、それぞれの施策ごとに作られていくのだろうということが、この次のステップとしてあるんだろうということは理解できますので、これは横に置いておいていいのかなというふうに思っています。

○上田知事 ありがとうございます。

○遠藤委員 今のともちょっと関係ありますけれども、もうちょっと全体をミクロ的というか、まとめてみようと思います。実際、今、上條委員がおっしゃったように、今後5年間で挑戦する取組①、②、③に全部上のものが落ちているんですね。例えば、①は学力の向上を目指すと同時に新しい学習というものを何とかしようと、2枚目で見ると分かるんですけど、今のアクティブ・ラーニングを含めた新しい学習、それを育てていこうと。②は、学習データとするから私はちょっとおかしいのかなと思いますが、つまり学習力、学び、習う力の向上ということになれば、これは個人の力もあり、環境も含むんですね。そういう力の向上のためには環境も全て含んでいくということでは、これも1枚前でいうと正に3から4、5までも落ちていると。③は、いわゆる教育基本法13条を反映した地域

と学校と家庭の連携の問題、今これは欠かせませんので、これはやっぱり生涯学習、それから地域の目標5、それから目標10までのこれを含んでここに落ちているというふうに考えれば、大体この中でしっかり何かをやっていくことによって、全体の基本を見渡せるのかなという感じはしています。そういうつもりで1枚目をお作りになったと思います。ですから、これをさらに3つに落としたわけですから、今度3つの下にまたちょっと詳しく説明がついていけば、市町村とか県全体がどういうふうに重点的に力を入れればいいのかということがもう少し分かってくるのかなという感じがします。

○上田知事 ありがとうございます。

教育長、このあたりで少し補足的な説明、あるいは意見を開陳していただければと思います。

○小松教育長 実際には、10の目標と30の施策の下に施策ごとにまた事業がずらっとあって、その事業はほとんど、そんなに変わらないですよ。予算が爆発的に増えるということがあるかどうか分かりませんが、それでもなければそんなには変わっていかないということがまず1つあるということでもあります。そういった中で、埼玉の強みを生かしながら、今までよりは、ちょっとというか、かなり何歩か踏み出したいというのが今後5年間で挑戦する取組の3つなんですね。

この①は、ある程度これまでの延長ではありますが、かなり延長幅が長いものだと思います。②は、出所は同じですが、今まで余りやっていない、いわゆるアダプティブラーニングという個別学習のところに踏み込む、ちょっと違う世界に入っていくものだと思います。

③は、これまでやってはいますが、先程申しましたように、今まで学校のほうが助けてもらうだけだったんですけども、学校を使って地域がもっと強くなっていくという、ちょっと欲張ったものです。教育というのは確かに一人一人がどう充実した人生を送っていくことができるようにするかということですが、それを通じて、埼玉県あるいはもうちょっと小さく、県内の各地域が教育を使ってどう元気になっていけるかというところまでちょっと考えたいというものになっています。

そういうわけで、ちょっと踏み出したい①、②、③を強調して本日の資料は作っているわけですが、最終的に県民にお見せするときには、そんなに今日ほどこれが強調されるわけではないと思っています。ただ、実際にやっていくのは、ここにかなり大きな力を注ぎたいというふうに思っています。

それから、若干分かりにくいというか、課題があり基本理念があり視点があり、目標がありみたいな、何かいっぱいあります。それが実は階層にはなっていないで、理念というのは一番上にあるんですけども、視点と目標というのは、視点が上にあってその下に目標があるという形になっていないで、視点がいろんなものに絡まっていっていると思います。

例えば、協調学習ということ言えば、当然、視点1を目標にしているものですが、多様な人々との学び合いということを手法として使っていて、これを抜きには考えられません。そして、結果的に生涯を通じて学ぶ力を養っていくということになっているので、この視点1、2、3というのはいろんなところに絡まり合っていて、別の軸を形成しています。それがちょっと分かりにくくなっているかなと思いますので、うまく整理ができればと思います。

それから、「主に児童・生徒に対する施策」、「主に子供を取り巻く環境に関する施策」、「あらゆる年齢層に対する施策」というまとめ方をしているのは、実は有識者会議の委員の中で、こういうふうにまとめたらという御示唆があったためです。けれども、これ自体がちょっと分かりにくいということであれば、ここもまたちょっと変える工夫はできると思います。

ですので、目標の立て方とか施策で何か抜け落ちているところはあるかどうか、そういったところは概ね大丈夫ということによろしいでしょうか。

○上田知事 今教育長が言われたように、基本理念の「豊かな学びで未来を拓く埼玉教育」と、その下にまた、「誰もが参画し得る生涯を通じた多様な学びを実現し、自身の人生や社会の未来を切り拓く力を育成する」とあって、この部分が分かれて、視点が3つ作られているような感じも多少あります。

○小松教育長 そうですね。

○上田知事 だから、視点と言いながらも、ある意味でこれは理念でもあるということで、この視点1、2、3をまとめたら、場合によっては、何か1つの理念という形で言えるかもしれません。それで、一言で言ったらどうなるかということ、豊かな学びでと、こういうことになるのかもしれませんが。そういうまとめ方のほうが場合によっては分かりやすいかもしれません。そうした理念を実現するための施策、あるいは基本政策というのが何かあったりして、その下に施策があるとか、そういう組み方もあるのかなと思います。

施策も、言い始めると多分もっと増えるでしょう。あれも入っていないんじゃないか、

これも入っていないんじゃないかということが出てくるでしょう。一般的なものを取りまとめてしまうとこうなったけれども、無理にこの視点1、2、3ということの中にはめようとすると、なかなかはまらない。先程上條委員が指摘されたようにはまらないし、ダブったりはみ出たり論外になったりするの、視点の下に落とす10の目標と30の施策という表現にしていくと、ちょっと辛いと思います。何かここはやっぱり基本理念とうまくまとめたほうがいいのかもしれませんがね。だからといって、10の目標と30の施策が困るという話ではなく、必要なことばかり書いてあるわけで、そういうまとめ方はあるかもしれませんが。

ただ、それはもう事務方の優秀な方々がいらっしゃるの、うまく取りまとめていただけたと思います。基本はやっぱり何が一番理念で、なおかつ、その中でもプロセスとして、埼玉としてはこういうことをやりながら、ということだと思います。多分、日本国民として、あるいは世界人としての基本理念というのは日本全国全ての県、全ての市町村、皆同じだと思います。それから人生100年時代を踏まえると、学び直しは何度でも必要だろうし、多分そうだと思うんですね。

したがって、2期の計画の成果と課題というのが一定程度ありますから、それを踏まえると、3期の進行というのはやっぱりきちっとやることはやって、なおかつ、そのやり方についても埼玉の独自性を出したらいいねというのがみんなの意見だし、誇り得るものがある、その誇り得るものはこれだねと、それを活用しながら、あるいはそれをもっと充実させながら、こう言うは何ですけども、みんな贅沢で、学力も上げたい、心も豊かにしたい、おまけに地域も良くしたい、できれば全ての親についても良い親になっていただきたい、こんなことまで全部思っているわけで、なかなかそんなことが私たちに全部できるわけではありません。しかし、だからといって諦めるわけにはいきませんし、環境づくりについて一歩でも前に進めていくという、そのことが要求されているわけです。

そこそこ御意見は何か収れんされつつあるような気がしますので、それぞれまたこの点はしっかり押さえて、編集というかまとめてもらいたいという部分をまたそれぞれ、今度は順繰りに行きますので、門井委員の方からどうぞ。気になるところだけ申し上げておいて、あとは優秀な皆さんがたくさんおられるので、うまくまとめていただけるものと思っております。

○門井委員 やはりせっかくいいものができ上がったので、これをいかに県民の方に見ていただくかというためには、私、余り好きなやり方じゃないのですが、やはり見せる、読

んでくれといってもなかなか読んでくれないので、見せる努力というか、見せることを考えるのもありかなと思います。

ですから、そんなにお金をかけなくても、知事がおっしゃったように、いろんなバージョンごとに、例えば、パネルを使ってでもいいですが、こういう視点で今後5年間、こういうことをやるんですよ、これを分かってほしいというのを10分ぐらいでビデオか何かで作って、それを先生方に見てもらったり地域の方に見てもらったり、いろんなところにそれぞれのバージョンごとにお配りをして、何かの会合のときに見ていただくとか、そういった工夫をまず入り口としていただくのが良いのかなとかねがね思っておるところでございます。

○上田知事 ホームページやSNSで、それぞれ関係者、関係団体等々にも出せるし、市町村にも出したりすることもできると思いますし、PTAとかにも出せると思いますし、いろんな使い方もあると思いますので、それはできるようにしていただければいいんじゃないかなというふうに思います。

○後藤委員 1枚目の概要を見てみましても大きな文字で書いてあって、やっぱり一番目を引くのは連携・協働という文字だというふうに思います。その際に、2枚目の中で、唯一、どこと連携したと書かれていますけれども、カウンターパートはどこなのか、どこと一緒に連携してどういった成果を目指していくのかということを確認に書く必要はあるんじゃないかなと思います。これを進めていく上で、どこと連携をしてどこと協働していくことが考え得るということを確認したらいいかと思います。できるものとできないものがあるかもしれませんが、そういうことも全て想定をしながら、5年間の計画を立てることはすごく大事なことはないかと考えます。

○上田知事 ありがとうございます。

○遠藤委員 やはり、これを使う側の立場ですね。それがうまく伝わるような形にまとめられたら、1枚目はこれでいいと思います。これを基にして、使う側はどう使っていくのかということが見えるような全体像にしていきたいというふうに思います。

特に最近、埼玉の学力向上で、アカデミックエクセレンスが先行していますけれども、私はヒューマンエクセレンスを先行させた埼玉教育でありたいというふうに思っています。

○伊倉委員 私は教育委員をさせていただいて、教育のことを自分なりにこのように勉強させていただいたり本を買って読んだりして、とても自分の地域活動が変わりました。と

というのは、やはり自分が何のために現場で活動しているのかということを知事もおっしゃっていましたが、いろいろな視点で考える際に、教育という視点が加わったおかげで、単純に地域の活性化ではなくて、すごく地域の未来を本当に切り拓いていく、作っていく一翼を担っているんだという思いを持つようになってきました。

そういう意味でも、この視点の1、2、3というのは、上條委員もおっしゃっていましたが、とても大事なことだというふうに考えていますので、より多くの一県民、一市民が何のためにこのいろいろな施策や県の事業があるのかということ、一人でも多くの大人が理解することが大事なと思います。

事業を展開していくのは決して行政だけではなくて、一人一人の大人が子供のためにか、自分たちの未来のためにやることなので、やはり分かりやすく、かつ何のためにということを強くたく打ち出す必要があるというふうに思っています。自分ももうちょっと勉強しようと思っています。

○上田知事 ありがとうございます。

○上條委員 先程いろいろ申し上げたんですけれども、このペーパーそのものは内部的に概要をまとめただけなので、今の段階でどうこう言うつもりは全くありません。ただ、見せていくに当たっては、我々が見ていても、こうじゃないかああじゃないかという議論が出るということは、一般の方が見たら、非常に分かりにくいということは間違いない。順番に見ていくと、人間の頭の中というのは大体ロジックに動いていきますから、それでなるほどと感ぜられるような見せ方をしていく必要が本番のところではあるんだろうというのがまず1点です。

もう1点だけちょっと追加しておきたいんですけれども、これから先5年間で一番変化するのは何なんだろうというふうに考えますと、学校の建物は変わらないし、教科書がそんなに大きく変わるわけじゃないと思います。多分教える先生方が変わる、採用が難しくなってきたりというようなことが、これから先5年間というのはかなり明確になってきて、時代の変化の一番大きいところじゃないかと思うんです。したがって、そういったものを、いかに水準を上げていくかということが県学調の1つの目的でもあるわけです。そこをいかにこの5年間でこなれたものにしていくかということで、結果として、育成や研修体系の見直しだとか内容を変えていくとかというようなこと、あるいは臨任の先生方に対しても研修内容を変えていくとかというようなことを具体的に手を打っていかないと、5年後には手遅れになり兼ねないので、その部分は施策の実現の中でよくよく検討し

て進めていきたいなというふうに思います。

○上田知事 ありがとうございます。

話の中でも出てまいりましたが、やっぱり県の教育振興基本計画は市町村の皆さんたちも参考にされるというお話もあるので、彼らから見たときにどんな取り方があるのかというか、やっぱり市町村バージョンが作られる時に、なるほどこういうのは良い、これは県に合わせたいね、積極的に合わせたいね、積極的に学びたいねという、そういう作り方というのは大事かもしれませんね。

そうしていかないと、ある意味ではもったいないかもしれません。全くそのまま真似されても意味がありませんし、あるいはまた全く無視されるのも全く意味がありません。小中学校ともすごく関係していますし、市町村の現場力というのでしょうか、市町村ほど現場力があるところはありませんので、そこがまたしっかりやっていただかないと、どうにもならない部分もありますので、そのことをやっぱり意識していかなくてはいけないのかなというふうに思っています。もちろんこれ、意識された部分でやっているわけですから、さらに一層意識しなくてはいけないと思っています。

また、最後に上條委員が言われたように、実際、現場で子供たちと接する教師の力量、これによって決まってくる。良い親に恵まれていなくても、良い地域に恵まれなくても、良い教師に出会ったら、子供は結構幸せですね。私はそんなふうに思っております。私は小学校5年、6年のときに良い担任の先生にめぐり会ったので、今日の私があると思っています。

どこかで中学までぐらいに、一人でもいいから波長の合うことも含めて良い教師に、もっと会えればたくさんいいのしょうけれども、そういうことがあったら、なかなか親も選ぶこともできませんし、子供のときには地域も選ぶことができませんので、本当に偶然にこの担任の先生、あるいは部活の先生、あるいは何かの形で出会った先生に恵まれたら、これは本当に幸せだというふうに思います。そういう意味では、教師の力量というんでしょうか、そういったところは、もうこういう文章だとか教材をはるかに越えた力になるというふうに思いますので、これがまた一番難しいということにはなるのだろうとも思いますが、是非こうしたところも考えていただければありがたいと思っています。

全くの愚見ですが、1週間ぐらい山の中に入れて合宿でもすると、器用、不器用というのが、中学校の教員ができる人かできない人か、指導力がある人かいない人かというのはすぐ分かると思います。なかなか座学の研修では分かりづらいかかと、私は勝手に思ってい

ます。蛇足の意見を申し上げましたので、全く気にしないでください。

では、教育長、少し何か補足的な意見がありましたらお願いします。

○小松教育長 今日是指標の方についてはお話が出なかったと思いますが、指標をどうするかというのはとても大事で、今までとそんなに変えるわけにはいかないのですが、今後、この一番下に書いてあるように、より客観的なデータに基づいて、いわゆる勘とか経験と度胸に基づいたらだめと言われてはいますが、今までの教育はどうも勘と経験と度胸でやっていたみたいなどころがあると言われており、そうではない、きちんとしたデータを取りながら、それを確認して、また次の手を打っていき、それがどうであったかという検証をするという、そういう行政手法というのをもう少し第3期のときには強化をしていかないといけないというふうに思っております。

いろいろ御意見をいただきまして、ありがとうございました。

○上田知事 では、取りまとめをさせていただきます。

大変闊達な貴重な意見をいただいたというふうに私は理解しております。それぞれの責任者もすぐ真後ろに控えております。多分に違った角度からの意見等もあったので、参考になったと思いますし、また、しかるべき意見については虚心坦懐に受け入れていただいて、取りまとめをお願いしたいというふうに思っています。

取りまとめの段階等で、それぞれの委員の皆様にもこんなふうにこの間の意見については入れたり、あるいは修正したり、あるいは配列を変えたり等々についても、小冊子になる前にお伝えして、また再度意見を聞く努力をしていただきたいと思いますので、よろしくお願ひしたいと思っております。

今日は本当に貴重な時間、そしてまた大変意味のある議論を展開していただきまして、誠にありがとうございました。

それでは、進行を教育長に代わります。

○小松教育長 以上をもちまして、平成30年度第1回埼玉県総合教育会議をこれで閉会いたします。

どうもありがとうございました。

閉 会